

虚空遍歴

＊
＊

山本周五郎



虚空遍歷
**

山本周五郎

新潮社版

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1969

虚空遍歴* (山本周五郎小説全集16)

昭和四十四年八月三十日発行
昭和五十四年三月十日十五刷

定価 九五〇円

著者 山本周五郎

著作権者 清水きん

発行者 佐藤亮一

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部・東京(03)二六六―五二一

編集部・東京(03)二六六―五四一

振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

虛
空
遍
歷

＊
＊

九の一

沖也はあぐらをかいて坐り、手酌で呷るように飲んでゐた。酒を注ぐときはゆっくりと、まるで寸を計るように慎重に注ぐが、盃を口へもってゆくと喉へぶつつけるような手つきで、いっぺんに飲みほすのであった。

そこは立慶町の「たちばな」の奥座敷であるが、いまは座敷などというおもむきは見られなかった。隅のほうに二人分の夜具がつくねてあるし、盆やけんどんや広蓋が勝手なところに置かれ、燗鍋のかかっている火鉢のまわりには、角樽や燗徳利や、井、皿、小鉢、めし茶碗から箸、めし櫃までがちらかっていた。——これらの中で、沖也は酒を飲み、生田半二郎は小机に向って書き物をしてゐた。二人とも髪はほつれているし、無精髭は伸びたまま、肌着の袴にも垢のよごれが見えた。

二人がこの座敷へこもって七日になる。箕面の事があつたあと、並木万吉らが仕返しに来るかもしれないので、九郎右衛門町のほうは暫く留守にするほうがいい、と生田がすすめ、おけいもそうしてくれとくどいた。そのとき生田は、沖也の新しい浄瑠璃のことを聞いて、「たちばな」の座敷を借りるついでに、そこで自分が台本を書こうと云いだしたのだ。

——新井泊亭なんぞよりましなものを書いてみせる。

生田はこう云って草稿にかかった。例の天竜川の与六一家を主題に、冲也があら筋を立てたもので、部分的にはふし付けもできているのを、三幕の台本にまとめようというのだ。ここへ移ってから七日間、二人は外へはいちども出ず、生田が書く側から冲也がいろいろ注文をつける、生田が尤もと思えばよし、さもないときは議論になるといったふうで、まだ第一幕も終ってはいなかった。

「いまちょっと思いましたが」と云って生田が筆を止め、冲也に振返った、「——あのときのごまのはい、金造とかいう名だったな、あの男はあれからどうした」

冲也はぼんやりと生田を見た。顔は蒼白く瘦せ、眼は赤く濁っていて、生田のほうを見ているのに、生田を見ているような眼つきではなかった。

「知らないね」と冲也は答えた、「——大阪へ帰る途中、神崎川という川のところで別れたままだ」

「それっきりか、宿はどこなんだ」

冲也はだるそうに首を振った。

「知らないのか、ひどいもんだな」と生田はあきれたように云った、「二度も危険を知らせてもらったのに、宿ぐらい訊いておく気になりそうなものじゃないか」

「彼のほうでおれの住居を知っているさ」

「それは結構なことでございますな」生田は皮肉にあいそ笑いをしてみせた、「用があればまた先方からいらっしゃる、おまえさんは下世話に通じているよ」

「どうしてあの男のことなんぞ云いだすんだ」

「この芝居に使えないかと考えたんだ、ひょっと思ひだしたんだがね、品川と箕面道、二度も同じ出来事が重なったというのは、事実でなければ絵そらごととしか思えない、それが現実にあつたとなると、奇遇というよりもなにか因果関係があるように感じられるじゃないか」

「金造もそんなようなことを云っていたよ」

「それでだね、この芝居の主役の与六」

「与六は本名だ、芝居では弥六となっている筈はずだろう」

「よろしい、その弥六が豪家の資産を使い果たすね、その相手の女にごまのはいの兄があることにするんだ、つまり金造という男が女のうしろにいて」

「だめだ」沖也は顔をしかめた、「そんなよけいな者は入れないんだ、筋はできるだけ単純でなければいけない、悪だ、まだとか善だ、まだとか、因果関係などを絡ませることは絶対に避けてくれ、これは平凡な人間たちの悲劇なんで、お芝居になつてはいけないんだ」

「それはわかつているよ、しかしまあおれの考えも聞いてくれ」

生田半二郎は筆を置いて、自分の考案を話した。沖也は聞いているのかいないのか、角樽の酒を片口へ移し、それを爛徳利に注ぐと、冷のまま手酌で飲んだ。生田の話が終ろうとしているとき、声をかけて襖ふすまをあけ、女中のおはるが顔を出した。座敷へはいろいろとはせず、顔だけ出して生田にめくばせをした。

「うるせえな」と生田が云った、「呼ばないときは来るなと云つたろう」

「お人がみえてます」とおはるが云った。

「人が来た、——おれにか」

「竹本座の方です」

生田はよしと頷いて立ち、ちょっと人に会つてくると沖也に云つて、おは、といっしよに出ていった。

「こうしてはいられない」沖也は独りでそつと呟いた、「おれはどうかしなければならぬ」それからまたぼんやりとした顔つきで、どこかへゆかなければならない、と口の中で囁いた。いつごろから始まったのか、自分でも記憶はないが、黙つてものを考へてるとき、または人と話をしていながら、ときどきふつと意識がよそへそれる。——どこか遠くで呼んでゐる者があるようにも感じられるし、眼に見えないにかの力が、自分をどこかへひきつけるような感じもあった。どちらにしろ、そこにいる自分は本当の自分ではなく、じつは遠いどこかに現実の自分がある、といったような、おちつかない気分にとらわれるのだ。——それは一瞬間で終るときもあり、半刻あまり続くこともあつて、その意識のそれているあいだは、いま話している相手の存在さえわからなくなるようであつた。

生田半二郎が、見知らぬ男といっしよに戻り、竹本座の近松紋太であるとひきあわせた。紋太はおどろくほど長い顔で、顎が長くしゃくれてい、人がふきげんなときするように、下唇の突き出た口をへ、の字なりにむすんでいた。年は二十五から三十のあいだで、古い小紋の着物に羽折をかさね、菖蒲革の足袋をはいているのが、眼をひいた。——もとは義太夫浄瑠璃をやつていたのだらう、作者部屋の者だというが、喉のつぶれたような、韻の深いしゃがれ声で話した。

「いや、近松でも半二や徳叟とは縁がありません」と紋太は云つた、「人形浄瑠璃がすっかりさびれまして、誰も本気に身を入れてやる者がいなくなりました、このままでは人形芝居も亡んでしまうかもしれませんので、勝手に巢林子の姓を借り、及ばずながら復興させてみたいと考えているのです」

云うまでもなく、巢林子は近松門左衛門の別号であって、冲也が早くから門左衛門に心酔していたこと、常磐津をはじめてからその浄瑠璃本を集め、心中物はすべて暗誦できるほど詳しいこと、などを知っている生田半二郎は、必ず強い反応を示し、感動するにちがいないと思った。けれども冲也はなんの感情もあらわさないし、紋太を見る眼つきもよそよそしくつめたかった。

「十日ばかりまえのことでしたか、わたくしは生田さんからあなたの話をうかがい、由香利の雨という本も読ませてもらいました」と紋太は続けた、「生田さんはあれを人形芝居でやれないだろうか、と仰しゃったので、わたくしのまわりの者とも相談したところ、みんなたいそう乗り気になったのです」

冲也の眼が静かに生き返るように見えた。彼は紋太に領いて、生田半二郎のほうへ振向いた。「つまらない役者より人形のほうがいい、そう思ったんだ」と生田が云った、「うまく当れば人形芝居のために役立つしね」

「費用はどのくらいかります」と冲也が訊いた。

「入費よりも問題はやれるかやれないかです」と紋太が答えた、「失礼ですがわたくしどもはあなたの浄瑠璃をまだ聞いていません、冲也ぶしで人形が使えるかどうか、まずそれから片づけてゆきたいんです」

「いいでしょう」冲也は領いた、「そちらの都合のいいときに、いつでも聞いてもらいます」

それで話はきまり、近松紋太は帰っていった。

「当るとは思えないな」冲也は紋太が去るとすぐに云った、「どうせこころみにやるのなら、由香利の雨でなくこんどの新しい物にしたいがね」

「まだ本もできてないんだぜ」生田は沖也の前に坐り、自分の盃を取りながら云った、「ふし付けたってまだできあがってはいない、由香利の雨なら、よければすぐにでも稽古にはいれるからな」

「あれはもう古いんだ、筋立てもあまいし、ふしもあまい、おれにはもう興味がなくなっているんだ」

「作者があまいと思うくらいで、見物にはちょうどいいのさ、いま評判になっている芝居をみてもわかるだろう、とにかく見物をひきつけることが先だよ」

沖也がふいと生田を見た、「いつ人形芝居なんぞへ話をもっていったんだ」

「中藤が箕面へいった日さ」と生田は答えた、「人形芝居はまるつきりすたれたが、滅亡させたくないと思ってる者がいないわけじゃあない、植村ぶん楽という熱心な人があって、若い人形使いたちの面倒をみている、それを思ひだしたから近松紋太に相談してみたんだ」

「しかし竹本座は義太夫ぶしだろう」

「そんなことはない、半太夫ぶしでも豊後ぶしでも興行した例はある、沖也ぶしならまず間違いないんだな」

「酌をしよう」と沖也が云った。

九の二

数日のち、道頓堀に近い植村ぶん楽の家で、沖也は「由香利の雨」の全曲をうたった。集まった人形使いは六人、近松紋太が世話役で、ぶん楽もその席につらなつた。むろんひき語りであり、

馴れない三味線で調子がよく出なかったけれども、それは集まった人たちに感動を与え、立役とおやまをやる人形使いの三人は、すぐにでも稽古を始めたいと云った。主人のぶん楽も氣にいったようすで、家人に酒の支度を命じたが、生田半二郎はそれを辞退し、冲也を促していとまを告げた。

「どうしたんだ、急に」外へ出ると冲也が訝しそうに問いかけた、「まだ話すことが残ってたんだぜ」

「酒はだめだ」と生田は首を振った、「おまえさんは酔うと平気で毒ぐちをきく、せつかく纏まるものをぶち毀したくはないからな」

「おれがそんなに酒癖がわるいか」

「二人で一杯やろう」と生田が云った、「おれなら馴れてるから、どんな毒舌でも拝聴するよ、今日は祝ってもいい日だからな」

冲也はうれしそうに頬笑んだ。こつちで再会して以来、初めて見る微笑であるが、江戸にいたときのような明るさはなく、どこにかげのある疲れたような色が感じられた。道頓堀で飲みだし、日の昏れるまでに三軒まわり、それから芝居町の付近を避けて、生玉神社のほうへいった。人形芝居がうまくゆきそうだということで、冲也は久方ぶりに希望がわいてきたらしく、かなり酔ってからもきげんがよく、しきりに浄瑠璃の話を続けた。

「少しおちつけよ」と生田はしばしば制止した、「そう気ばかりあせったってしょうがない、これは一生の仕事なんだろう、もつと腰を据えてやろうじゃないか」

「おれはあせってはいない、あせってできるような仕事じゃあない」と冲也は云った、「けれどそうおちついてもいられないんだ、おれの浄瑠璃にはまだなにかが欠けている、やりたい仕事は

あとにつかえているし、沖也ぶしの芯がきまっていけない、早く舞台にかけて効果を齎かめないうちは、いまかかっている仕事だつてめどがつけにくいんだ」

「わかった、しかし今夜だけはこれで話を変えよう」生田は沖也に酌をしてやりながら、強引に話題をそらした、「——そこでひとつ、正直なところを聞きたいんだが、おけいさんとはいまでもなんでもないのか」

沖也は不審そうな眼で、生田半二郎をみつめながら、ゆっくりと酒を啜った。

「なんでもないかとは、どういうことだ」

「言葉どおりさ、まえにもいちど話したことがあるだろう」

「ああ、そのことか」と沖也は無関心に云った、「そのことなら、まえに話したとおりさ」

「それで平気なのか、おけいさんは縹緞もよし氣だてもやさしい、なによりもしんから中藤のためにつくしている、そうだろう」

「わかりきったことをなぞるな」

「そういう人といっしょに旅をし」

「同じ部屋で寝てか、——それもまえに話したことだぜ」

「正直に云つて、おまえさんはあの人をどうする氣なんだ」と生田はしんけんに訊いた、「江戸からこんな大阪くんたりまで付いて来て、苦勞もいとわず面倒をみるのはだて、や酔興じゃあない筈だ、女がそこまでじつをつくすのは、しんそこ惚れていればこそ、とは思わないか」

「思わないね」沖也はあつさり首を振った、「思わない理由も話したぜ」

「陰膳のことなら聞いた」

「いまでも陰膳は欠かしたことがないよ、いや、ちょっと待った」沖也は生田の云おうとする言

葉を遮った、「このまえ生田は、おけい、が陰膳を据えるのは嫉妬の裏返しだ、というようにことを云った、本心はおれにやめろと云わせるためだとかね、しかし違うんだ、もしもおけい、にそんな気持があれば、おれだって男だから感じない筈はない、しょっちゅう顔を合わせていて、めし、もいっしょに喰べ、寢床を並べて寝るんだ、どっちかにこれっぽっちでもいろいろがあれば、とっくになんとかなっているよ」

生田半二郎は舌打ちをし、はらでも立てたように酒を飲んだ。

「こんな関係は青っ臭いかもしれない」と沖也は続けた、「生田から見ればうんざりするかもしれないが、こんな男と女があるという事実はどうしようもないだろう」

「中藤にはわかっていないんだ」生田は独り言のように云った、「いろいろごとというものは、男からくどきかけるものだ、心の底では惚れていても、女によつてはそぶりにもあらわせない、たいていは嫌いなようなふりさえするものなんだ、——尤もおれのおつねのような女もいることはいるが、あんなのは珍しいだろう、たいていは男からくどかれて初めて、心の底に隠れていた気持が動きだすんだ」

こんどは沖也がはらを立てたように、そっぽを向いて酒を嚥った。

「たしかに、芸は芸で大切だ」と生田はちよつとまをおいて続けた、「——中藤にはお京さんという妻もあるし、生涯を賭けても悔のない沖也ぶしという仕事がある、だが、おけいさんにはなにがあるんだ、沖也ぶしは間違いない、天下の沖也ぶしになるだろうし、そして中藤はいつかはお京さんのところへ帰ってゆくだろう、そのときおけいという人はどうなるんだ、おけいさんの手になにか残るものがあるのか」

生田半二郎は持っていた盃を、手荒くつけ板の上へ置いた。その音が高くひびき、すぐに脇の

ほうで客の一人がうたいたした。沖也はそれまで噎るように飲んでいたが、しだいに飲みかたが早くなり、顔が蒼ざめてきた。

「どうやらまた」と沖也が囁くように云った、「おれを殴りたくなったらしいな」

「うぬぼれるな」と生田が答えた、「おれは尊敬できない人間を殴るほどぼけやあしねえよ」

「おれが尊敬できないと云うのか」

「ああ、芸のために人間を利用するようなやつは尊敬しないね、どんなにずばぬけた芸だって芸は芸さ」生田は手酌で酒を注いだが、酒の大半は盃の外へこぼれた、「——たかが浄瑠璃ぐらいのために、女ひとりの一生をむだにさせるようなやつは大嫌いだ、そんなやつはつらも見たかあねえや」

沖也は齒をみせて笑った、「おい、毒舌を拝聴すると云ったのはどっちだ」

「おれはおけいさんが可哀かわいそうなんだ」

それならおけいを引取れ、と云おうとしたが、口には出さず沖也は酒を呷った。

「夜あがりは続かぬものよ 朝の雨」とさっきの客がまたうたいたした、「——二枚屏風をひきよせて、寒さをしのぐ肌と肌」

「いいな」と生田が囁いた、「夜あがり、おまえさんの端唄はうただぜ」

「出よう」と沖也は盃を置いた。

「どうして」

「自分の唄だけはがまんがならない、自分の作った端唄を聞くと、おれは死にたくなってしまふんだ」沖也は財布をそこへ置いて立ちあがった、「——これで勘定をたのむ」

そして逃げるように外へ出ていった。

酔いだしたのはそのあとすぐで、なお二三軒まわったことや、生田が諄く悪口を云い、自分も癪がたかぶってきて、生田を辛辣にやりこめたこと、また生田が飽きずに、おけいさんが哀れだ、と繰り返していたことなどは覚えてゐるが、そのほかのこまかい経過は記憶がなかった。軀が疲れきつていて、喉がひどく渇くの、水を飲む氣力もなく、寝返りさえもできないでいると、誰かが肩へ手をかけてゆり起こした。

「あのう、もし、もし」と女の声が云った、「そんなに眠ってばかりいたらあかんげの、もし、お客さんどうなさるんかの」

へんな訛りだな、と沖也は思った。大阪弁でもない、語尾があがつて長くのび、押しつけるような調子に聞える。どうしたんだ、おれはどこにゐるんだ、と半ば眠りからさめながら沖也は思った。

「なあお客さんったら」と女はまた沖也の肩をゆすった、「そんなにうちが嫌いなんやったら、ほかのおもっしえそうなこうを呼びなはいの」

あくどい髪油と香料の匂いが、夜具の中のぬくみに温ためられて、吐きたくなるほど強く鼻をついた。熱をもったようなあつい脚が、沖也の脚へねっとり絡まり、寝衣の裾を分けて女の手が伸びて来た。沖也はうしろへ身をずらせながら起きあがり、寝衣の前をかき合せた。

「ここはどこだ」と沖也は云った、「生田はどうした」

左が壁、右が唐紙、畳三帖くらい、鼻のつかえそうな狭い部屋で、屋根裏かと思うほど天井が低かった。垢じみた古夜具の上に、自分の着物や帯が投げだしてあり、紙のやぶれた行燈が、枕許でまたたいていた。どこかに隙間があつて風がはいるとみえ、行燈の火は絶えまなしに揺れているのだ。

「ああさぶ」女は自分の胸を抱いて身ぶるいをした、「なんてさぶいんやろ、なあ、どうしなさるの、お客さん、なあ」

「伴れがいたろう、伴れはどうした」

「お伴れはんなんてよろっしますがの、なあ、お客さん」女はすり寄って、冲也に両手でしがみついた、「うちお客さんに首ったけや、なあ、ねまっしょうが」

「やかましいぞ」と唐紙の向うで云うのが聞えた、「なにをもめてるんだ」

生田半二郎の声であった。

「起きろよ」と冲也が云った、「帰るんだ、生田、一人でも帰るぞ」

冲也は立つて着替えをした。女は夜具の上に坐ったまま、口をあけて、茫然と冲也の着替えを眺めていた。唐紙の向うで、生田半二郎がぶつぶつとなにか呟いてい、冲也はその部屋から出ていった。

「ちょっと待ってくれ」と生田の云うのが聞えた、「もうすぐだ、一人じゃあ道がわからないぞ」

九の三

それから七日のち、冲也とおけいは京へ移った。

植村ぶん楽の家で、「由香利の雨」の本読みにかかったが、噂が伝わったのだらう、角座と中座から抗議が出た。土地の作者ともめごとを起こした人間の作を、同じ土地で興行させるわけにはいかない。それでも押してやる気なら、どんな間違いが起こっても責任はそっちにある、というのであった。角座とか中座とか、はっきりその名を出しはしないが、並木万吉や鶴来徳三から